

8. 市民運営型コミュニティ施設のネットワークづくり

横浜市民運営施設ネットワーク
(神奈川県横浜市)

1. 活動の背景と目的

横浜の市民活動の一つの成果が「市民運営型コミュニティ施設(略:市民運営施設)」の増加にあると言えよう。公設民営あり、また、公的機能を負いつつも民設民営あり、形態は様々、施設の目的も様々な市民運営施設が増えつつある。

そうした市民運営施設にかかわる市民たちが、折に触れてその苦労や工夫や知恵を個別それぞれの運営から学び合う場を求めていた。今回の活動の目的は、より良い運営のために学び合う場づくり、すなわち「ネットワークづくり」にあった。

■活動の背景

2001年3月19日に開かれた「よこはま市民運営施設フォーラム 汗と笑いの市民運営奮戦談義」には、日曜の夜というのに200人もの市民が「かながわ県民サポートセンター」に集まった。主催の「横浜市民運営施設フォーラム実行委員会」は、「よこはま市民運営施設ネットワーク」の前身であり、「市民運営施設」が横浜の市民運動のなかの共通テーマとして議論されるようになったはじまりであった。

フォーラム開催に至るまでの経緯を簡単に述べておく。

ネットワークの底に流れるものは、真の市民自治の場づくりに努力してきた市民たちのエネルギーにあることも確かであるが、もう一つ行政の事業も大きな力となった。

後者にあたるのが、都市計画局調査課の「まちづくり活動支援事業」であろう。横浜のまちづくり系市民団体のネットワーク形成を推進したのが、まちづくり活動支援事業であった。市民まちづくり推進会議(仮称)や、情報誌「ヨコハマ 人・まち～まちの人がまちをつくる～」の刊行により、市民と行政が相互に情報を提供しあい、交流を深めることが出来た。

市民エネルギーの元をたどると、1997年度には「ヨコハマひと・まち横丁展」(全市的な交流事業、実行委員会結成)にたどり着く。参加団体の中から「ヨコハマひと・まちわ創り連」が結成され、市民ネットワークの継続を宣言した。ここに市民まちづくり推進会議のメンバーが揃った。

その動きを受けて1998年度「都市デザインフォーラム」では、市民まちづくり会議「ヨコハマ 人・まちフォーラム～地域発意をまちづくりにつなげる～」を開催、分科会のテーマの一つ「市民発意を受け取る行政のしくみ」を取り上げ、サブテーマで



汗と笑いの市民運営奮戦談義

「行政の市民参加事業のあり方」も話し合った。

96年度から各区役所で始まった市民と行政の「パートナーシップ推進モデル事業」が全市で展開され、幾つかの区では市民運営の施設が誕生しようとしている時期であった。

「山手234番館」「エコライフかながわ」などである。かかわった市民の中には夢に終わった「まちづくりセンター」の実現に結びつ付け得ると嗅覚を働かせた者たちがいたのは、それまでの積み重ねが有ったればこそである。

市民にも行政にも安心できる施設の運営形態として市民運営が認知された。幾つかの先行事例にかかわった先駆者たちの成果がやっと日の目を見たといえよう。限られた局や施設で認められてきた市民運営だったのが、幾つかの区で市民に公的施設の運営を任せる事業が「推進モデル事業」として進められた。地域コミュニティセンターもあれば、洋館を活用した山手の街づくり活動推進もあれば、リサイクル・コミュニティ・センターもある、という具合で施設のテーマも様々であった。町内会・自治会などの地域コミュニティの代表、環境保全やまちづくり活動などの担い手、さらには一般市民も参加した2年にわたる事業を通して、行政と市民の、また市民同士の協力関係が形成されていった。

それまで各地で実験的に行われてきた公的施設の市民運営が底流となり、いつの間にか流れの上に浮かび上がった。施設の市民運営は大きな流れになった。

■活動の目的

公的施設の慣れない運営に四苦八苦する中、公園や古民家の市民運営の先例がたよりであった。前述のような交流が既にあったので、先行しているモデルを訪ね、学びあった。

交流はますます密になった。学ぶべき運営のノウハウは近くの施設ではなかなか得にくかったのである。

1999年度の「山手234番館」が行った「市民トーク交流会～市民運営から発信できること～」は「エコライフかながわ」に引き継がれ、議論が重ねられた。

市民が主人公であった。市民が市民や行政から学ぶ場、交流の場が求められた。より良い運営を目指し「横浜市民運営施設フォーラム実行委員会」が結成され、その発表の場が「よこはま市民運営施設フォーラム 汗と笑いの市民運営奮戦談義」であった。公設民営はもとより民設民営の施設関係者、行政など幅広い市民が集まった。

会終了後まで話し合いが続いた。時間が足りなかった。さらに学び合おう、情報交換を行いたい、との願いが「市民運営施設連続ネットワーク」を生んだ。

II. 活動の内容

そして2000年度事業として、各施設での「連続研究会（山手234番館、舞岡公園、エコライフかながわ、都筑民家園）」と、「市民運営施設フォーラムPartⅡ～コミュニティ施設をまちづくりの拠点に～」を開催するに至った。

抽象化された議論はしばしば空論になりがちなので、連続研究会ではまず現場を訪ね、各館がかかえる個別の課題を中心に話し合うこととしてプログラムを組み立てた。

■市民運営施設連続研究会

問題を深めるためには、課題を抽出し、様々な視点から検討してみる必要があった。そのためには、出来れば現場に出向き、そこで話し合いの場を設けた方が、ボランティアをはじめ多様な市民が参加できるのではなかろうか、との考え以下の施設で連続研究会を開催した。テーマはそれぞれの施設から提案を受け、調節したものである。

①山手234番館

8月18日（金）14:00～17:00

「みんなで支えています～地域とのかかわりの中で～」

②舞岡公園

9月20日（水）14:00～17:00

「市民運営の人材は誰が用意するの？～華のコーディネーターを目指して～」

③エコライフかながわ

10月10日（火）14:00～17:00

「体験！エコライフかながわ～市民運営組織について～」

④都筑民家園

11月16日（木）13:00～16:00

「古民家と生涯学習～ボランティアスタッフのパワー～」

■市民運営施設フォーラムPartⅡ～コミュニティ施設をまちづくりの拠点に～

4館を巡ったあとで課題をさらにまとめたものが、「市民運営施設フォーラムPartⅡ～コミュニティ施設をまちづくりの拠点に～」となった次第である。

●3月31日（土）10:00～16:00

会場：フォーラムよこはま交流ラウンジ

テーマ別交流会

①市民運営施設とコミュニティ

- ・市民運営の意味
- ・地域組織との関わり方
- ・運営の継続

②ボランティアって何？

- ・ボランティアの責任と権利



市民運営施設連続研究会
第1回：山の手234番館



第2回：舞岡公園小谷戸の里



第3回：エコライフかながわ



第4回：都筑民家園

- ・ボランティア組織の運営のポイント（コーディネーターの役割）

③市民運営施設と行政とのパートナーシップ

- ・市民運営施設における行政とのパートナーシップとは？
- ・既存施設の活用
- ・総合行政としての市民運営の今後の可能性

④特別セミナー／スタッフ・ボランティアの保険・税金の実務

- ・各種保険・年金・税金など
- ・ボランティア保険、イベント保険

III. 活動の効果及び今後の課題

■活動の効果

「施設の運営とは何と手間のかかるものなのか、実際にやってみるまでは分からなかった」というのが、運営に関わった市民の最初の感想ではなかろうか。

まちづくり活動にとって地域拠点は大きな役割を果たす。より良い地域づくりを目指す時、拠点のあり方が大切な課題となってくる。公的施設の運営次第で活動の質も変わるだろう。「面倒くさい」と避けてはられない。

今回の「市民運営型コミュニティ施設のネットワークづくり」の仕掛け人たちの歩んできた道を振り返ると、まちづくり活動にかかわるうちに、施設との関係も見えてきて、公的施設の「利用」から運営への「参加」に、やがて企画にも「参画」する機会を得て、そして最終的に「市民運営」へと変わってきている。

公的施設といっても多様である。地域にとってある所では地域コミュニティ施設が、ある所では洋館が、ある所ではリサイクル・コミュニティ・センターが地域の要望として出されてくる。

市民運営に至る道筋も山あり谷ありのデコボコ道であった。合意形成なくしては何も進まないが、行政との合意、地域との合意、参加グループ内部での合意、どれ一つとっても生易しいものではない。同じテーブルにつくまでに時間がかかる。テーブルの上での会議も長丁場である。夕方から始まった会議が議論百出、夜が明けることすらある。

話し合いだけでは埒が明かない。活動をともにすれば合意が取りやすいのでは、と実験的施行を行ったところもある。仲違いしたり、助けられたり、「汗と笑い」と涙の連続であったろう。

うまく市民運営のコースに乗った施設ですら、その道はなだらかではない。初めてのことには戸惑いがつきもので、相変わらず試行錯誤の連続である。

初めは自分がかかわっている施設にばかり目が注がれていたのが、交流の結果、少し余裕が出てくる。ネットワークの成果である。個人的なお付き合いから始まった交流が、やがて大きな流れになってきた。それぞれの運営から学び合う場づくりか



市民運営施設フォーラム Part II

ら生まれた学習の成果もすぐに運営に活かされている。

そして、報告書のそれぞれが今後続く市民運営施設の関係者への指標となることと思われる。

2. 今後の課題

各施設での合意形成の過程からは、言うまでのないことだが多様な市民の活動が地域を支えていることを互いに確認し、地域を支える「まちづくりセンター」機能が施設に求められていることが読みとれる。各施設はやがては市民活動の拠点となって地域を支えることとなるであろうし、今後は既存の施設の活性化を検討する時には、地域の課題解決の場である「まちづくりセンター」化が視野に入れられていくであろう。

ネットワークにしても、ほぼ、初期の目的は達成されたが、1年間の活動を通してよりさらなるネットワークが必要であろうと参加者の多くは考えている。

「汗と涙」だけでは駄目で、プラス思考でないと市民運営のようなシンドイことは出来ない。押したり引いたりする術もネットワークを通して学び合った。連続研究会やフォーラム開催にはその3倍近い打ち合わせを持ったが、毎回は事例研究会そのものであった。市民運営そのものがまだ少数例のため一般的な市民活動の交流の場では共通の話題にはなり難かったこともあって、悩みを打ち明けたり、相談する場がなかった。喜びを共有する相手もいなかった。堰を切ったように話しはじめるメンバー、その一つ一つに頷く顔が揃った。形は代わっても、何らかのネットワークが必要であろうことは否めない。